



# 最新の科学 支える職人技

物理学の実験や観測などで使う機器を開発しているテクノランドコーポレーション。その技術は先進医療や素粒子物理学上の偉大な発見にも貢献している。清水孝志社長に、科学の最前線を担う技術を提供し続ける戦略を聞いた。

(聞き手・斎藤茂郎)

——会社の特長は。

「素粒子物理、原子力、宇宙線物理などの分野で、大学や研究所などで使われる電子機器の製造。宇宙の初期状態の再現などに使われる粒子加速器や、地球に降り注ぐ宇宙線、放射線などの粒子の動きとエネルギーを検出、測定する機器などを開発している。少人数で、特化した市場をターゲットにしている。製品の一部に使われている、粒子を

1990年、瑞穂町で創業。2014年に本社を羽村市に移転し、現在は同町に工場がある。2019年9月期の売上高は約1億2000万円。従業員は8人。

## 60 社長 清水 孝志 テクノランドコーポレーション

とらえるセンサーは、25秒のタンクステン製の糸が0・5ミ間隔で約450本張ってある。これは職人技で、世界一の技術と自負している」

——創業のきっかけは。

「ソフトウェア開発会社から、この業界に転職した。技術者として一から学び、大学の先生方との人脈もできて、転職先の会社の技術者と一緒に、技術部門を独立する形で当社を設立した。取引は大学の先生方と直接やりとりする

ことが多く、さらに卒業生が入った企業が引き続き注文してくれたり、海外の研究所でも使ってもらえたりして軌道に乗った」

——これまでの実績は。

「現在、100以上の大学や研究機関、企業と取引がある。高エネルギー加速器研究機構（茨城県）の加速器や、小柴昌俊東京大学特別荣誉教授のノーベル賞受賞研究の基となった観測施設「カミオカンデ」の一部にも製品が使わ

れている。東日本大震災後に、スクリーニング（放射性物質の汚染検査）機器を、日の出町の給食センターに納品した」

——業界の動向と転換期は。

「起業当初は、素粒子物理学の研究に国家プロジェクトで予算がついていたこともあり、盛んだった。だが、日本はあまり成果が出ず、この分野の需要はやや細くなってきた感がある。そんな中で医療分野に参入し、日立製作所（千代田区）と共同で粒子線がん治療器の開発に乗り出した。社運をかけて先進医療に携わったことが大きな飛躍になった」

——会社の信条は。

「諦めなければ失敗ではないがホリシ。それだけ失敗を重ねてきたということもあるが、たとえばがん治療器開発では、一部がうまくいくと別の部分で課題が生じるという感じで、5回以上最初から作り直した。しかし人命にかかわる仕事でもあり、失敗

からまた進むことで、世界に誇れる技術を獲得できた」

——今後の展望を。

「これまでの技術の応用で、現在、鹿児島県の桜島の火山を透視する実験を、東大の地震研究所と一緒にやっている。地上に降り注ぐミュー粒子を使って、福島第一原発の炉心部やエジプトのピラミッドの内部をレントゲンのように透視する実験が行われたが、同じやり方で火山内部のマグマの位置を調べる機器を共同開発している。自分は地学専攻だったので、この分野への応用には大きな関心があり、将来は噴火の予知にも役立つのではないかと期待をかけている」

——若者にアドバイスを。

「日本の技術の根底を支えているのは、中小企業だということを知ってほしい。就職で大手を目指す人は多いだろうが、根底の技術は町の工場が持っていることが多く、日本の下町企業の力は侮れない。そうした企業では、世界一の技術に直接触れる機会も多く、仕事の手応えを感じることもできる。会社のネームバリューにとらわれずに、自分の仕事を選んでもらいたい」



1959年生まれ。日の出町出身。84年に岡山大学理学部を卒業し、セントラル・コンピュータ・サービス（現NTTデータCCS）に入社。86年に電子機器開発の海津製作所に転職した後、90年にテクノランドコーポレーションを設立。創業時より現職。